

The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto

京都国立近代美術館
友の会会報

2006
Early Spring
第8号



エルンスト・バルラハ《読書する僧たち》1932年ブロンズエルンスト・バルラハ・ハウス(ハンブルク)

展覧会の

見どころ

ドイツ表現主義の彫刻家 —エルンスト・バルラハ展

エルンスト・バルラハ(1870-1938)は、20世紀を代表する彫刻家・版画家・劇作家のひとりです。「人間」を生涯のテーマとして、ユーモアや笑いなどの生きる喜びだけではなく、貧困や飢餓そして戦争などに直面する人々の存在を、作品の中で採り上げました。ドイツ表現主義のマニフェストともいえる「外が内になり、内が外になる」という彼自身の言葉に従い、人間の「生」と「死」を巡る感情を、簡素な輪郭線そして重厚または繊細な量塊で表現しました。その作品は宗教性をも湛えて、観る人を深い観照へと誘います。

バルラハは、医師の息子として、ドイツ北部ハンブルク近郊のヴェーデルで生まれ、ハンブルク普通工業学校、ドレスデン王立造形芸術アカデミーさらにはパリのアカデミー・ジュリアンで素描や彫刻を学びました。製陶高等専門学校教師を経て、南ロシアに旅し、自らの風土と大地と共に懸命に生きる農民たちの姿に深い感銘を受け、それを機に独自の作風を展開します。5年間のベルリン滞日後、1910年に同じくドイツ北部メクレンブルク地方の小都市ギュストローに移住し、彫刻制作の傍ら、数多くの木版画やリトグラフさらには戯曲を含む文学作品を発表します。1927年以降は、数多くの戦没者記念碑や教会堂聖像を制作し、そのいくつかはマグデブルクやリュベックなどで今も眼にすることができます。また、ハンブルク美術工芸博物館長ユストゥス・プリンクマンや陶芸家リヒャルト・ムッツとの出会いなどにより、バルラハは生涯を通して、日本を含む東洋の文化に強い関心と憧れを示しており、少なからぬ影響を受けています。

しかし1933年以降、ナチス政府により個人主義的な非協力者とのレッテルを貼られたバルラハの作品は、1937年の悪名高い「頽廃芸術展」に展示される一方、多くの作品が公共施設から撤去され、一部廃棄されるという憂き目にありました。そして政府による弾圧の中、バルラハは失意の中バルト海沿岸の港町ロ



エルンスト・バルラハ《夢見る人》1925年、木材、エルンスト・バルラハ財団(ギュストロー)

ストックでこの世を去ります。

本展は、「日本におけるドイツ年 2005/2006」に一環として、エルンスト・バルラハ・ハウス(ハンブルク)とエルンスト・バルラハ財団(ギュストロー)両美術館の全面的な協力のもとに、日本で初めて開催されるバルラハ展です。日本との関わりや、文学作品にも目配りしつつ、木彫12点を含む彫刻57点、素描75点、版画36点に関係資料を加えた約180点で構成される本展は、本国ドイツでもこの35年間開催されていない規模で、人間存在の根源をみつめ続けたバルラハ芸術の全容をご紹介します。

池田祐子(京都国立近代美術館主任研究官)

講演会のお知らせ

■3月4日(土)午後1時30分~3時
「天と地の間で—バルラハの人と芸術」

当館主任研究官 池田 祐子

■3月11日(土)午後1時30分~3時
「劇作家としてのバルラハ」

大阪外国語大学教授 市川 明氏
(いずれも定員100名 無料・整理券要)
於：当館一階講堂

如意ヶ嶽の眺め

この美術館の四階東向きの、大きなガラス窓からの眺めは絶景で、隠れた観光スポットになっているようだが、その窓も、内外の温度差の大きい今冬、水蒸気に曇っている日が多い。「まめにガラスを拭いて、景色が見えないではないか」と、お叱りを貰うのは毎冬のことである。美術館の窓から眺められるのは、北側の四明ヶ嶽から如意ヶ嶽を経て、粟田山あたりまでだが、その風景の細やかな美しさは、得難いものである。世界至る所の壮大な自然の美しさや、人工の巨大な遺跡、遺物などは、お茶の間に居ても、現代の人々は映像を通して結構満喫している。そこへは簡単に行けないという前提の下に、安心して見ている節さえある。だが、美術館からの眺めはそう言った類の風景とはほど遠い。真如堂、黒谷、南禅寺など、歴史の霜雪を経た堂塔がゆったりと自然の懷に抱かれ、深い歴史を秘めた比叡山や如意ヶ嶽がその背景に連なる風景は、単なる自然美ではなく、また、単なる人工の造形美でもない、きわめて高度な品格ある眺めとなっている。ストイックで、畑のように、しみじみと心に染み込む。

こんな上質の眺めの中に、強い朱と金彩をきらめかせて目に飛び込んでくるのが、平安神宮の大鳥居の笠木と鳥木の横腹である。ぎょっとするほどインパクトがあるが、神社の鳥居にとっては無礼者は、こちらの美術館の方かも知れない。兎に角、鳥居の横断面を見ることのできる貴重な観覧席である。ポップな眺めとして、



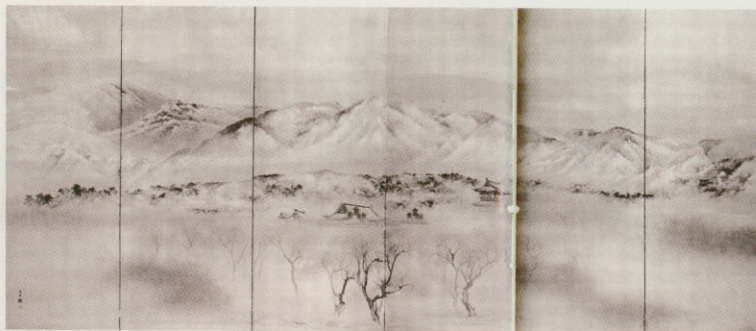
当館四階ロビーからの眺め

特に外国の人に人気があるようだ。

さて、しかし、この眺めを絵画の名作から探そうとすると、意外にも無い。浅井忠の関西美術院が岡崎にあった関係から、幾人かの浅井の弟子たちが、この付近の風景は画いている。本誌創刊準備号で紹介した田中善之助「萩と茶屋」、同じく第四号で紹介した村上華岳「二月乃頃」(日本画)、長谷川良雄「牧場風景」、三井文二「京都疏水ダム」等。いずれも、名所絵ではなく、ごく自然に、大正初期の京都郊外の風景として、風景画という意識で画かれているところに、嘘や創作のない美しさがある。先生の浅井忠の自然観照は、言うまでもなく、工部美術学校で教えを受けたイタリア人の師フォンタネージ(アントニオ・フォンタネージ・1818-82)の影響下にはぐくまれたものであるが、それはそのまま素直に、彼の弟子にも伝えられている。また、日本画家岸竹堂「東山全景図」(6曲1双屏風)の大作も創建当時の平安神宮が画かれていて面白い。

京都市動物園の池からは今でも、六勝寺の一つ、法勝寺の瓦の破片が拾い上げられる。源平の争乱の頃のことだ。そこからそう遠くない鹿ヶ谷から、如意ヶ嶽の前山の狭間の急峻な山路を辿ると、『平家物語』に有名な「鹿ヶ谷の密議」が凝らされたという俊寛の屋敷跡に到る。今は何も残っていないが、昭和40年代頃までは、幾本かの山桜が植わっていて、市内からその花の盛りが望めた。勿論、美術館の窓から親しく見える

場所である。俊寛は法勝寺の僧都だったと言われているから、この山も彼の日々の行動範囲だったのだろう。当時の都のどんな風景を見下ろしながら、彼らは密議を凝らしたのだろう。恐らく、今我が立つ場所には、円勝寺が偉容を誇っていたと思われる。(R.K.)



岸竹堂 東山全景図(部分) 明治初 個人蔵

2月14日(火)―4月2日(日) 浜田知明の彫刻と版画

浜田知明は大正6年(1917)熊本県に生まれました。戦前の東京美術学校(現・東京芸術大学)に入学、藤島武二教室で油彩画を学びました。昭和一四年(1939)、卒業と同時に陸軍に招集され、そのまま中国大陆に派遣されました。五年間に及ぶ軍隊での生活、中国での戦争体験は、浜田の芸術に生涯決して忘れることのない深い傷を残しました。浜田はかつて、ある出版社(『美術批評』1953年4月号)のアンケートに答えて、戦争を体験したことによって、人生観も作画する態度も、それと切り離してものを考えられなくなってしまった。と書き、後期印象派からモンドリアン、アルプに至る近・現代の美術を愛しながらも、それから目を離れた途端に、腹の底から、自殺することばかりを考えた軍隊のことや、従軍の途上で見た軍隊による窃盗、強盗、略奪、強姦、放火、殺人などの光景がわき上がってくる、と書いています。画家で

あった浜田は、それを表現する手段として、銅版画を選びました。最初の〈初年兵哀歌シリーズ〉が発表されたのは、昭和25年の第14回自由美術協会展ですが、昭和35年までに、浜田はこのシリーズを15点制作し、そのうち当館には、12点が収蔵されています。



当館では昭和47年から58年にかけて、〈初年兵哀歌シリーズ〉を含む銅版画73点を購入、平成7年には、1980年代後半に制作されたブロンズ彫刻6点を購入しました。銅版画作品は軍隊や戦争の非人間性をテーマとした〈初年兵哀歌シリーズ〉を中心に、70年代のヨーロッパ旅行を土台にした作品、人間の滑稽や醜さを揶揄的に表現した作品などを収集、彫刻作品は猿などの動物を通して人間を諷刺した作品群です。今回は、これらのコレクションの中から全彫刻作品と版画約30点を展示します。

友の会の催し

友の会2006年度上半期のご案内

今年度の友の会の活動ですが、昨年、京都市立芸術大学音楽学部との共催で、3度に亘って開演されたコンサートが好評でした。若い学生さんたちが、当館ロビーという、本来コンコンサート向きに作られていない空間をうまく利用して、盛り上げてくれましたが、本年も引き続き年3回のコンサートを予定しております。第1回は昨年同様、サマーナイト・コンサートになる予定ですが、芸大との調整が出来次第、あらためてお知らせいたします。当館会場でのコンサートでは、芸大の出演者のご家族や友人、一般の人々で結構混雑し、本式のコンサート会場でないハンディが克服できぬきらいがありますが、友の会との共催ですので、会員の方は特典を有効にご利用、お楽しみいただきたいものです。ただ、旁々開演には遅刻されませんように。折角の予約が無効になってしまいますので。

また昨年の初夏、滋賀県のみほ・ミュージアムと陶芸の

森の見学バスツアーを行いました。本年も、5月14日(日)の予定で、新緑の美しい湖東三山と佐川美術館へのバスツアーを行います。参加ご希望の方は、今からスケジュールを調整しておいてください。詳細については、近日中にご案内をいたします。なお、佐川美術館は催しの有無によって変更する可能性もあります。

長い間、開催が待たれました「藤田嗣治展」が5月30日―7月23日で開催されます。また、暑い最中の8月1日―9月10日には、色絵磁器や染付に画期的なデザインの見せしめをする「富本憲吉展」が開かれます。この二つの展覧会の間に、友の会独自の特別企画を考えています。

- 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 夜間開館
4月15日(金)―9月2日(金)までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
- 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)

※お車で越しの場合 岡崎公園駐車場(地下)をご利用の有料入館者は、駐車場の割引(1台1名)を受けられますので、駐車券をお持ちの上お越しください。

● 交通案内



独立行政法人国立美術館

京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111

テレフォンサービス 075-761-9900

ホームページ <http://www.momak.go.jp>